



## Osaka Gakuin University Repository

Title	ジュトランド論争とジェリコー The Jutland Controversy and Admiral John Rushworth Jellicoe
Author(s)	山口 悟 (YAMAGUCHI SATORU)
Citation	大阪学院大学 国際学論集 (INTERNATIONAL STUDIES), 第 25 巻第 1・2 号 : 1-31
Issue Date	2014.12.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

## ジュトランド論争とジェリコー

山 口 悟

### **The Jutland Controversy and Admiral John Rushworth Jellicoe**

YAMAGUCHI SATORU

#### *ABSTRACT*

At the battle of Jutland in 1916 during the First World War, the Royal Navy did not succeed to annihilate the German main fleet. After the War, the dispute about the cause of the unsuccessful result of the battle arose and led to the so-called Jutland Controversy in 1920s. John Rushworth Jellicoe, commander-in-chief of the British main fleet at the battle, was naturally a focus of this controversy and his command at the battle was criticised. This paper examines the relation of Jellicoe to the controversy.

Jellicoe was very cautious in his command and did not put his fleet at risk to gain a decisive victory at the battle of Jutland. Cautious command such as the deployment of the battle fleet away from the German fleet just before engagement and turning away to avoid torpedoes had been criticised.

The Jutland controversy had evolved in association with the compilation of the official Admiralty records of the battle of Jutland: *Harper Record*, *Naval Staff Appreciation*, and *Narrative of the Battle of Jutland*. Julian Corbett's *Naval Operations* vol. 3, by direction of the Committee of Imperial Defence, also had an

influence on this controversy.

The making of the records showed that the Admiralty had a tendency to underestimate and criticise Jellicoe's command at the battle. Jellicoe, who had already retired from active service, could have no direct and great influence on those records. However, he could have had indirect and not a little influence on it through the relationship with the compiler and author of the records: J.E.T.Harper and J.S.Corbett. Since Jellicoe was highly respected in the Royal Navy, the criticism of him by the Admiralty aroused sympathy for him and antipathy against the Admiralty, especially against the First Sea Lord, David Beatty.

Jellicoe did not make a blunder at the battle of Jutland. He just commanded his fleet in obedience to the prearranged battle orders. It is too severe to criticise him for subordinating to those orders. He fought the German fleet off at the battle of Jutland and succeeded to preserve the strategic predominance over the German Navy. He was a British contributor to the final victory in the First World War.

## はじめに

第一次世界大戦中の1916年に生じたジュトランド海戦において、イギリス海軍の主力艦隊たる大艦隊（Grand Fleet）は、帝政ドイツ海軍の主力艦隊である大海艦隊（Hochseeflotte）の撃滅に失敗した。この不首尾な海戦結果の責任の所在をめぐって、ジュトランド海戦の公式記録作成問題と連関して大戦後に生起し、1920年代を中心に展開されたのが、いわゆるジュトランド論争（the Jutland Controversy）である。この論争は、当然ながら大艦隊司令長官だったジェリコー（John Rushworth Jellicoe）を焦点の一つとして展開し、海戦での決定的勝利を逃した人物として彼への批判、あるいは弁護が展開された。

ジュトランド論争において、ジェリコーは公然と自らの弁護論を展開したわけではなく、大戦後には海軍の主流を外れていたこともあって、論争への直接的関係は希薄なように見える。しかし、彼が無視しえない影響をジュトランド論争の展開におよぼしたことは事実であり、論争について考えるうえで、ジェリコーの存在を軽視するわけにはいかない。

本稿は、ジェリコーを視角としてジュトランド論争を再考しようとするものである<sup>1)</sup>。ジュトランド海戦における彼の行動、それを踏まえてのジュトランド論争の展開を概観して、ジェリコーとジュトランド論争との関わりについて考察してみたい。

## 1. ジュトランド海戦の展開概要

1916年5月末にドイツ海軍はイギリス海軍戦力の一部を誘い出して撃破しようと企図し、大海艦隊を出撃させた。この動きを通信傍受によって詳細不明ながらも察知したイギリス海軍も、対応して大艦隊（Grand Fleet）

---

1) ジュトランド論争においても一つの焦点となったのは、ジュトランド海戦で巡洋戦艦隊を率いたビーティーである。彼とジュトランド論争の関わりについては、拙稿「ジュトランド論争とビーティー」（『軍事史学』第50巻 第3・4合併号、2015年3月発行予定）を参照。本稿は前記論考と関連するものである。

を出撃させた。かくしてイギリス側主力艦37隻、ドイツ側21隻を中心に、両軍合わせて250隻の艦艇が参加する大戦最大のジュトランド海戦がユトランド半島沖にて生起することになった。

英独艦隊ともに前哨部隊の巡洋戦艦隊と主力本隊の戦艦隊に分けられていた。

### 大艦隊

[戦艦隊] 司令長官ジェリコー大将直率。総旗艦アイアン・デュークと第1、2、4戦艦戦隊の戦艦24隻。第3巡洋戦艦戦隊の巡洋戦艦3隻。装甲巡洋艦8、軽巡洋艦12、駆逐艦51、機雷敷設艦1隻。

[巡洋戦艦隊] ビーティー (David Richard Beatty) 中将指揮。旗艦ライオンと第1、2巡洋戦艦戦隊の巡洋戦艦6。第5戦艦戦隊の高速戦艦4。軽巡洋艦14、駆逐艦27、水上機母艦1隻。

ジュトランド海戦当時、フッド (Horace Lambert Alexander Hood) 少将指揮の第3巡洋戦艦戦隊は、エヴァン・トーマス (Hugh Evan-Thomas) 少将の第5戦艦戦隊と部隊交換され、臨時に前者は戦艦隊に、後者は巡洋戦艦隊に属していた<sup>2)</sup>。

### 大海艦隊

[戦艦隊] 司令長官シェーア (Reinhard Scheer) 中将直率。総旗艦フリードリヒ・デア・グローセと第1、3戦艦戦隊の戦艦16。第2戦艦戦隊の前弩級戦艦6。軽巡洋艦6、駆逐艦32隻。

2) 巡洋戦艦隊に戦艦隊泊地での砲撃訓練の機会を与えるため、戦艦隊所属の第5戦艦戦隊は巡洋戦艦隊所属の第3巡洋戦艦戦隊と交換され、5月下旬に巡洋戦艦隊に合流した。6月2日に予定されていたスカゲラック海峡方面への出撃の機会に、第5戦艦戦隊は再び大艦隊主力へ戻される予定であった。Andrew Gordon, *The Rules of the Game: Jutland and British Naval Command* (1996; London: John Murray, 2005), pp.46-49.

〔巡洋戦艦隊（偵察部隊）〕ヒッパー（Franz Ritter von Hipper）中将指揮。旗艦リュッツオウを含む第1偵察群の巡洋戦艦5。軽巡洋艦5、駆逐艦30隻。

両軍ともに巡洋戦艦隊は前哨として主力戦艦隊に先んじて位置しており、まずは両軍巡洋戦艦隊の衝突、次いでドイツ戦艦隊、そしてイギリス戦艦隊の登場となる。本稿では海戦の展開を以下の4段階に分けて考える。

〔第1段階：南方への追撃（the Run to the South）〕イギリス巡洋戦艦隊によるドイツ巡洋戦艦隊の追撃。ドイツ巡洋戦艦隊はイギリス巡洋戦艦隊を自軍主力の戦艦隊へと誘引。

〔第2段階：北方への撤退（the Run to the North）〕イギリス巡洋戦艦隊がドイツ大海艦隊主力を発見して反転後退。今度はイギリス巡洋戦艦隊が大海艦隊をイギリス大艦隊主力の戦艦隊へと誘引。

〔第3段階：主力艦隊戦〕：両軍主力の会敵と大海艦隊による大海艦隊の追撃。

〔第4段階：夜戦〕夜戦と大海艦隊の離脱。

本稿はジェリコーに焦点を置くため、上記のうち第3・4段階に重点を置いて概観する。

第1段階：5月31日14時20分以降に、両軍巡洋戦艦隊の接触・交戦がはじまり、戦力的に優勢なイギリス巡洋戦艦隊は転針して、ドイツ巡洋戦艦隊を追撃する。いわゆる、「南方への追撃（the Run to the South）」である。しかし、この転針の際、第5戦艦隊の転針が遅れ、その戦闘参加も遅れることになった。

15時49分より、両軍の巡洋戦艦同士の砲撃戦が開始された。イギリス巡洋戦艦隊は戦力的優勢を十分に活用できず、逆にドイツ巡洋戦艦隊の砲撃により大打撃を被ることになった。旗艦ライオンが爆沈しかねない打撃を受けただけでなく、巡洋戦艦2隻（インディファティガブル、クイー

ン・メリー)が爆沈したのである<sup>3)</sup>。この惨状に接したビーティーがもらした、「今日の我らの艦艇はどこかひどくおかしいのではないのか」との言葉は有名である<sup>4)</sup>。

第2段階：追撃を受けて後退するドイツ巡洋戦艦隊の目的は、イギリス巡洋戦艦隊を大海艦隊主力へと誘引することだった。かくして16時30分に、イギリス巡洋戦艦隊は大海艦隊主力の戦艦隊と遭遇する。海軍省の情報からその出撃を予期していなかったイギリス艦隊にとって驚きの展開であったが、これは大海艦隊撃滅の好機到来を意味した。

イギリス巡洋戦艦隊は、大海艦隊を大艦隊主力の戦艦隊へ誘引すべく反転し、今度は逆に大海艦隊の追撃を受けることになる。いわゆる「北方への撤退 (the Run to the North)」である。しかし、このとき再び第5戦艦戦隊の反転が遅れ、以後、追撃してくる大海艦隊の攻撃にさらされることになった。

第3段階：巡洋戦艦隊が敵と接触したとの報告が入ったのちの14時35分以降に、ジェリコーが直率する大艦隊主力の戦艦隊は敵艦隊に向かって断続的に増速して進みはじめた<sup>5)</sup>。次いで敵巡洋戦艦発見の報を受け、ジェ

3) Q砲塔に貫通弾を受けたライオンは弾薬庫誘爆による爆沈の危険にさらされたが、瀕死のハーヴェイ (Francis John William Harvey) 海兵隊少佐が弾薬庫扉の閉鎖と注水を命令したことにより爆沈を免れた。戦死したハーヴェイには、ヴィクトリア十字章が遺贈された。根本的には、海戦に先立っての砲手長グラント (Alexander Grant) 准尉による弾薬取扱い手順の改善・厳格化がライオンの爆沈を阻止したと考えられる。Eric Grove, ed., "The Autobiography of Chief Gunner Alexander Grant: HMS Lion at the Battle of Jutland, 1916," in *The Naval Miscellany*, vol. 7, ed. Susan Rose (Aldershot: Ashgate, 2008), pp.379-404.

4) Alfred Ernle Montacute Chatfield, *The Navy and Defence: The Autobiography of Admiral of the Fleet Lord Chatfield* (London: William Heinemann, 1942), p.143.

5) 海軍省の不注目の情報から大海艦隊主力の出現を想定しなかったために大艦隊主力の戦闘参加が遅れ、結果として大海艦隊撃滅に失敗したとする旨の海軍省批判は一般的である。しかし、ゴードンは、海軍省の情報処理が適切だったとしても、海戦の展開に大きな差異は生じなかっただろうとしている。Gordon, *The Rules of the Game*, pp.415-416. cf. Arthur Jacob Marder, *From the Dreadnought to Scapa Flow*, vol.3: *Jutland and After, May to December 1916*, 2nd ed. (Oxford: Oxford University Press, 1978), pp.45-48 (hereafter cited as *FDSF*).

リコーは、ビーティーを支援すべく優速の第3巡洋戦艦戦隊を先遣した。さらに、16時38分に大海艦隊主力発見との報告を受け、ジェリコーは艦隊決戦生起の可能性を海軍省に報じた。先行する第3巡洋戦艦戦隊は17時40分頃に交戦海域へと至り、戦闘を開始してドイツ巡洋戦艦隊を大海艦隊主力方面へと転針せしめた。

大艦隊の戦艦隊も交戦海域へと接近し、18時15分には、航行隊形から戦闘隊形たる単縦陣への展開を開始し、順次戦闘に入った。後述するが、この展開方法がのちのジュトランド論争における争点の一つとなる。さて、戦艦隊に先行する第3巡洋戦艦戦隊はドイツ巡洋戦艦隊に効果的な砲撃をおこなうも、18時30分過ぎ頃に巡洋戦艦インヴィンシブルが戦隊司令官フッドとともに爆沈した。

大艦隊戦艦隊の単縦陣への展開は18時40分頃までには完了するが、それまでもその攻撃はますます激しくなり、大艦隊主力の出現に驚愕した大海艦隊は転針して後退を図った。しかし、大海艦隊は、ジェリコーによって頭を押さえられたかたちに追い込まれ、つまりは、いわゆるT字戦法をとられ、危機的状態に陥ってしまう。この危機を脱すべく、シェーアは艦隊に180度急反転（Gefechtskehrwendung）を命じて戦闘から離脱しようとした。このため大海艦隊を見失ったジェリコーは、単縦陣の戦闘隊形を解いて追撃を図った。

大海艦隊が反転してきたため<sup>6)</sup>、19時過ぎに大艦隊は再び単縦陣への移行を図りつつ砲撃を開始した。大海艦隊はふたたびT字戦法の態勢にとらえられて痛撃されたため、司令長官シェーアは、この危機を切り抜けるべく、巡洋戦艦隊に敵への突撃を、そして水雷戦隊には雷撃を命じた。この雷撃に対し、19時22分につづいて25分にも、ジェリコーは敵艦隊から遠ざかるかたちでの退避運動（turn away）をおこなって損害を回避したが、大海艦隊は危機から離脱して撤退していった。この魚雷退避の問題も、のちのジュトランド論争における争点となる。

6) 大海艦隊を反転させて大艦隊の方向へ進んできたシェーアの真意は不明である。そうすることで、彼は大海艦隊を大艦隊の後方へとすり抜けさせることができると考えたのかもしれない。Gordon, *Rules of the Game*, p.458.



魚雷退避運動ののち、再び転針して敵を求めたジェリコーであったが、大海艦隊の捕捉はならなかった。先行する巡洋戦艦隊のビーティーは、戦艦隊の支援を得て敵艦隊の分断を図ろうとし、19時47分にジェリコーに対して戦艦隊先鋒を巡洋戦艦隊に続かせてほしいとの支援要請をおこなった。これをジェリコーは承認したが、ジェラム（Thomas Henry Martyn Jerram）中将指揮する第2戦艦戦隊と巡洋戦艦隊の連携は速度差もあって難しく、結局、積極的追撃は実現しなかった<sup>7)</sup>。20時過ぎには日没となり、さらに視界状況が悪化したことから、以後、散発的な砲撃戦は生じたものの、大規模交戦は再開されなかった。

第4段階：21時となって夜が深まると、ジェリコーは夜戦を避け、翌朝の再戦を期して大海艦隊の離脱を阻止すべく追撃をつづけた。ジェリコーは大艦隊を、西方に位置する大海艦隊と東方のドイツ側領域との間に配置して大海艦隊の脱出を阻止しようとした。しかし、大艦隊の速度が大海艦隊よりも勝っていたため、それを追い越すかたちとなり、大海艦隊は大艦隊の後方をすり抜けて脱出に成功することになった。水雷戦隊を中心に各所で散発的に戦闘が生じたが、ジェリコーが敵情報を下級指揮官、また海軍省からも適切に得られなかったこともあり、結局、大艦隊は大海艦隊を取り逃がした<sup>8)</sup>。「栄光の6月1日」の再現はならなかったのである<sup>9)</sup>。

イギリス側の損害は巡洋戦艦3隻を含む各種14隻、戦死6,094名など。

7) ビーティーはジェラムに強い不満を抱き、ジュトランド海戦後に初めて会った際、ジェラムを無視したと伝えられる。Stephen Wentworth Roskill, *Admiral of the Fleet Earl Beatty: the Last Naval Hero: An Intimate Biography* (London: Collins, 1980), p.178. cf. Marder, *FDSF*, vol. 3, pp.142-145.

8) A criticism of "Errors made in Jutland Battle", written by Jellicoe in 1932, 1936, in *The Jellicoe Papers; Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Earl Jellicoe of Scapa*, vol.2, ed. Alfred Temple Patterson (London: Navy Records Society, 1968) (hereafter cited as *JP*), pp.451-452.

9) フランス革命戦争中の1794年6月1日に大西洋においてハウ（Richard Howe）率いるイギリス艦隊がフランス艦隊に大勝した海戦を、イギリスは「栄光の6月1日（Glorious First of June）」とよぶ。

ドイツ側の損害は巡洋戦艦1隻を含む各種10隻、戦死2,551名であった。イギリス側がより大きな損害を被った一方、この海戦によりドイツ海軍の閉塞状態が変化したわけではなく、戦略的なイギリスの海上優勢が動くことはなかった。しかし、トラファルガーの大勝利を達成できなかった失望感は、イギリスにとり大きなものであった<sup>10)</sup>。

## 2. ジュトランド海戦でのジェリコーの指揮をめぐる争点

ジュトランド海戦において、ジェリコーの指揮する大艦隊はドイツ大海艦隊の撃滅に失敗したが、その最大の要因は、交戦海域への主力戦艦隊の到着が日没近くとなったために、その十分な交戦時間を確保できなかったことにある。優勢なイギリス海軍にとり、不測の事態が生じやすい夜戦は考慮外であった<sup>11)</sup>。交戦時間の不足ゆえに大勝利を逃してしまったという結果論から、のちのジュトランド論争においては、交戦可能時間の短縮に結びついた艦隊運動は強く非難されることになる。具体的には、18時台の戦闘隊形への艦隊の展開と19時台の魚雷退避運動が主要な論争点となった。

### A. 戦闘隊形への戦艦隊の展開

大艦隊の戦艦隊は、戦闘隊形に移行するまで、戦艦4隻から成る縦隊が6個横列になる航行隊形をとっていた。ジェリコー座乗の総旗艦アイアン・デュークは、これのみ戦艦3隻からなる第4戦艦戦隊第3戦艦隊の前にあって、その縦列の先頭に位置していた。（参照、図1）

10) たとえばフィッシャー（John Arbuthnot Fisher）元帥は、ジュトランド海戦直後、ひどく落胆して室内を歩き回り、人生の30年をこの日の準備に費やしたのに彼らは私を裏切った、と繰り返し言いつづけていたという。Joseph John Thomson, *Recollections and Reflections* (London: G. Bell and Sons, 1936), p.219. 海戦直後、彼はジュトランド海戦を大失敗（disaster）ととらえていた。To Captain Thomas E. Crease, 3 June 1916, in *Fear God and Dread Nought: The Correspondence of Admiral of the Fleet Lord Fisher of Kilverstone, vol.3: Restoration, Abdication, and Last Years, 1914-1920*, ed. Arthur Jacob Marder (London: Jonathan Cape, 1959), p.353.

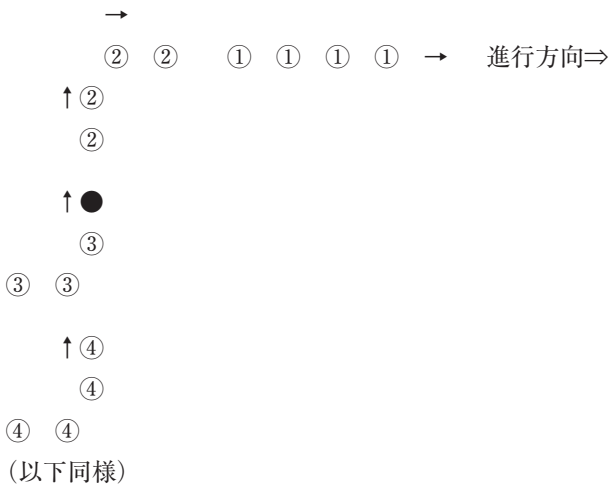
11) Marder, *FDSF*, vol.3, pp.27-29.

戦闘に入る前に、この航行隊形は戦闘隊形である一縦列の単縦陣へと展開する。単縦陣には艦隊の最大火力を敵に投射できる利点があった。航行隊形から単縦陣への移行は、どちらかの端に位置する縦列の戦艦隊が先行し、それに隣接する戦艦隊が先行する隊の方向に転針し、さらに先行する隊のすぐ後方に続くべく再び転針するという運動を、各縦隊がくり返すことによってなされた<sup>12)</sup>。(参照、図2-1、2-2)

図1 航行隊形

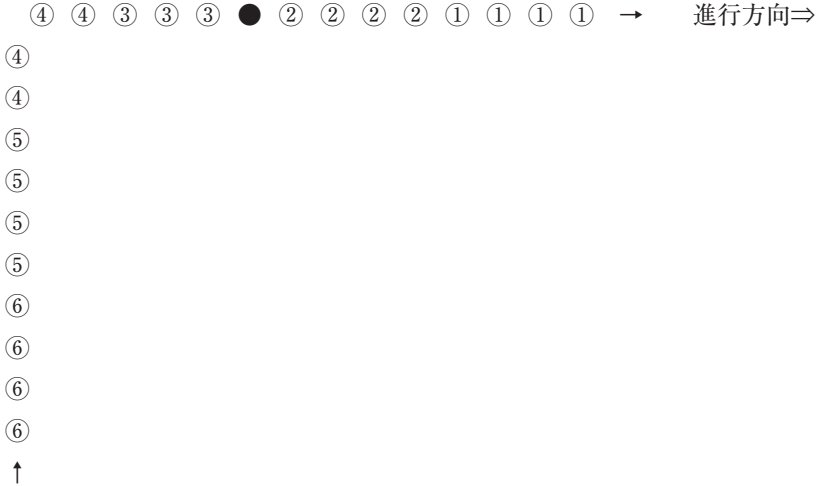


図2-1 航行隊形から単縦陣へ



12) Gordon, *Rules of the Game*, p.435.

図 2-2 航行隊形から単縦陣へ



単縦陣の形成中は、位置的な関係から敵へと指向できない砲が出るため、艦隊は十分な攻撃力を敵艦隊に投射できずに脆弱な状態となる。それゆえ、隊形変更在先立って敵艦隊の位置や針路などを正確に知ることが非常に重要であった。しかし、巡洋戦艦隊や第5戦艦戦隊からの情報は不十分で、測定位置の誤差により不正確な情報も多く、正しい情報の欠如がジェリコーの苦境を招いた。交戦海域に入りつつある31日18時前になって、ジェリコーは想定していたよりも早く、かつ想定していた正面ではなく右翼方向（西方）に位置する敵艦隊に遭遇しつつあることを悟ったのである<sup>13)</sup>。

戦闘隊形への移行には15分から20分かかるため、いまや一刻も早い移行開始が必要であった。しかし、総旗艦アイアン・デュークから見て最右翼の隊（第1戦艦戦隊第6戦艦隊）を先頭に左回りのかたちで展開するか、あるいはその逆に最左翼の隊（第2戦艦戦隊第1戦艦隊）を先頭に展開するのかが、大きな問題であった。大海艦隊がジェリコーの右翼方向に位置

13) Extracts from Jellicoe's proposed revised version of a new Appendix to "The Grand Fleet", 27 Nov. 1922, *JP*, vol. 2, pp.421-425.

していたことから、最右翼の隊を先頭にした展開の方が、より敵と近接した位置に艦隊を導き、より早期に戦闘を開始できた。当初、ジェリコーも当然に右翼先行展開を心に描いた<sup>14)</sup>。しかし、より敵に近接した位置で展開する場合、いまだ戦闘隊形への移行中に敵の攻撃を受けてしまい、不利な状態に陥る危険性があった。さらに最右翼の第1戦艦戦隊には比較的旧式の艦が多く、大海艦隊からの攻撃に対する防御力に不安が感じられた。敵情の不明なジェリコーは、大海艦隊の戦力を過大に想定してもいた<sup>15)</sup>。それらの懸念から、ジェリコーは、最左翼の戦隊を先頭とする、より東方に寄った展開を決断する。

この左翼先行展開により、たしかに日没までの交戦時間は短くなり、それゆえ、のちのジュトランド論争においてジェリコーへの批判を招いた<sup>16)</sup>。しかし、この展開によって、大艦隊は接近する大海艦隊の頭を押さえるかたちで、つまりT字を形成するかたちの非常に有利な状態で大海艦隊を攻撃することができた。また、左翼先行展開では、最も強力な第2戦艦戦隊を先頭とすることができ、ジェリコー座乗の総旗艦も単縦陣の前部に位置することができる利点があった。さらに、この東方寄りの展開は、夕方の残光に大海艦隊が浮かび上がる状態をもたらして大艦隊に砲撃上の有利を得させただけでなく、大海艦隊を西方に留めおいてそのドイツ方面への帰還を阻止するかたちに大艦隊を置く利点をももたらした。以上のことを考慮すれば、右翼よりも左翼先行展開の方が、より妥当であったと認められよう<sup>17)</sup>。

左翼先行展開に対する反論として、ジェリコーの総旗艦を先頭に、その位置する中央の縦隊を先行させて艦隊を戦闘隊形に移行させるべきだっ

14) John Rushworth Jellicoe, *The Grand Fleet 1914-1916: Its Creation, Development and Work* (New York: George H. Doran, 1919), pp.346-348.

15) Extracts from Jellicoe's proposed revised version of a new Appendix to "The Grand Fleet", 27 Nov. 1922, *JP*, vol.2, pp.425-426.

16) e.g. Carlyon Wilfroy Bellairs, *The Battle of Jutland; The Sowing and the Reaping* (London: Hodder and Stoughton, 1920), pp.151-156.

17) Gordon, *Rules of the Game*, pp.440-441, 619-621; Marder, *FDSF*, vol.3, pp.100-108. ゴードンは、ジェリコーがジュトランド海戦以前より左翼先行展開を既定していたと考えている。

たとの説もある。これはチャーチルが唱えたことでよく知られる中央先行展開説である<sup>18)</sup>。たしかにその展開をなせば、敵艦隊に近づきすぎて不利な状態で攻撃を受けることを避けつつ、左翼先行展開の場合よりも、より敵に近接した位置に大艦隊を導き、より早期に戦闘を開始できたであろう。しかし、この中央先行展開は、より複雑な艦隊運動と信号伝達を要するために艦隊に混乱を引き起こす可能性が高く、現実的とはいえないものである。実際、この展開策をジェリコーが選択肢に入れていたとは思われない<sup>19)</sup>。

## B. 魚雷の回避策

さて、ジュトランド海戦において19時20分台にジェリコーがおこなった魚雷回避もジュトランド論争において強い批判を招いたが、それは回避運動が大海艦隊から遠ざかる退避（turn away）であったためである<sup>20)</sup>。この時、ドイツ水雷戦隊が発射した魚雷は31本であり、そのうち21本が大艦隊へ到達したが、退避運動もあって主力艦への損害は生じなかった。しかし、敵から遠ざかるかたちで退避したジェリコーへは、第1戦艦戦隊司令官のバーニー（Cecil Burney）中將や第4戦艦戦隊司令官のスターディー（Frederick Charles Doveton Sturdee）中將も批判的であった<sup>21)</sup>。

接近してくる魚雷の針路に対して平行となるように艦の針路を向けるなら、被雷可能面を最小化でき、被雷の可能性を低減できる。これは魚雷に向かう場合（turn towards）でも、遠ざかる場合でも同じである。それならば、日没が近づく時間に貴重な交戦の機会を失わないように敵艦隊に向

18) Winston Leonard Spencer-Churchill, *The World Crisis*, vol.3, pt.1 (London: Butterworth, 1927), pp.148-149.

このチャーチルの主張も含めて『世界の危機』におけるジュトランド海戦の叙述には、「海軍幕僚評価」の影響がみられる。Marder, *FDSF*, vol.3, p.104; Alfred Temple Patterson, *Jellicoe: A Biography* (London: Macmillan, 1969), p.247; Roskill, *Earl Beatty*, p.336.

19) Marder, *FDSF*, vol.3, pp.106-107.

20) e.g. Bellairs, *The Battle of Jutland*, pp.187-188, 200-203.

21) Marder, *FDSF*, vol.3, pp.133-134.

かって前進すべきではなかったか、というのがジェリコー批判派の見解である。

しかし、魚雷から遠ざかるように退避する場合、魚雷との相対速度が小さくなるため回避運動をおこないやすく、さらに魚雷が航走限界距離に達して無力化するかもしれないという利点もあり、魚雷に向かって進むよりも安全である<sup>22)</sup>。実際、このジェリコーの退避運動においても、かろうじて回避された魚雷が数本あり、魚雷の危険性がかんがみれば、彼の対応が誤っていたとはいいがたい。また、魚雷攻撃に抗して前進を続け、第二波以降の魚雷攻撃を、特に別方向から受けた場合、その回避は困難であろう<sup>23)</sup>。

当時のジェリコーは敵水雷戦隊の戦力を過大に見積もっており<sup>24)</sup>、さらに海軍省の誤った情報からドイツ海軍が魚雷の雷跡を見えにくくすることに成功したと考えていた<sup>25)</sup>。ジェリコーは実際よりも敵魚雷の脅威を過大にとらえていたわけだが、その認識は、当時の彼にとって、やむをえないものであった。もとより、ジェリコーが魚雷に対して慎重な対策を採用することはジウトランド海戦前からの既定方針であり、それを海軍省も認めていた<sup>26)</sup>。また、そもそも危険を冒し魚雷に抗して追撃をつづけていたとしても、敵味方の艦隊間の距離と相対速度の関係上、大海艦隊に対する十分な交戦時間は確保できなかっただろうと考えられる<sup>27)</sup>。以上のことをかんがみれば、ジェリコーの魚雷への対応策を非難することは難しいのでは

---

22) 魚雷回避の問題については、下記を参照。Gordon, *Rules of the Game*, pp.461-467; Marder, *FDSF*, vol.3, pp.9-10, 131-140.

23) A criticism of "Errors made in Jutland Battle", *JP*, vol.2, p.451.

24) Extracts from Jellicoe's proposed revised version of a new Appendix to "The Grand Fleet", 27 Nov. 1922, *ibid.*, p.425.

25) A criticism of "Errors made in Jutland Battle", *ibid.*, p.451; Marder, *FDSF*, vol.3, pp.132-133.

26) Jellicoe to the Secretary of the Admiralty, 30 Oct. 1914 and Extracts from Grand Fleet Battle Orders in force on the eve of the Battle of Jutland, *JP*, vol.1 (1966), pp.76, 248; Marder, *FDSF*, vol.3, pp.139-140.

27) Extracts from Jellicoe's proposed revised version of a new Appendix to "The Grand Fleet", 27 Nov. 1922, *JP*, vol. 2, p. 432; Marder, *FDSF*, vol.3, pp.139-140.

ないだろうか。

### 3. ジウトランド論争とジェリコーの関わり

1916年11月にジェリコーは軍令部長に任命され、ビーティーが大艦隊司令長官職を後継した。以後、ジェリコーは海軍全体の戦争指導に当たることになるが、通商破壊戦を展開してイギリスを苦境に追い込んでいたドイツ海軍潜水艦、いわゆるUボートへの対策をめぐり首相ロイド・ジョージ（David Lloyd George）や海相ゲッデス（Eric Campbell Geddes）の信頼を得ることができず、翌年12月末に解任された。大戦終結後には、1919年2月より彼は海軍力整備について助言すべく英自治領諸国に派遣され、翌年2月の帰国後にニュージーランド総督に任命されることになる。しかし、ニュージーランドへ赴任する前に、彼はジウトランド論争に巻き込まれることになった。

第一次世界大戦終結後、ジェリコーは大戦の回顧録（『大艦隊1914～1916年（*The Grand Fleet, 1914-1916: Its Creation, Development and Work*）』）を出版する。この動きがジウトランド海戦にまつわる論議を惹起することを懸念した軍令部長ウィームズ（Rosslyn Erskine Wemyss）は、ハーパー（John Ernest Troyte Harper）大佐にジウトランド海戦の公式記録作成を指示した<sup>28)</sup>。ジウトランド論争と、それへのジェリコーの関与は、主に海軍省によるジウトランド海戦公式記録の作成問題に関連して展開していくことになる。

ハーパーには報告書や航海日誌等の記録文書資料のみに基づいて、批評を含まず公式記録を作成するようにとの指示が与えられ、1919年2月に作業は開始された。この公式記録、いわゆるハーパー・リコード（Harper Record）は同年10月2日に完成したが<sup>29)</sup>、11月に軍令部長へ就任したビー

28) Patterson, *Jellicoe*, p.230.

29) 1919年10月24日、軍令部次長のブロック（Osmond de Beauvoir Brock）中將は、翌月の新軍令部長ビーティーの着任を待つべきと考え、最終的承認を思いとどまったという。John Ernest Troyte Harper, *Facts Dealing with the Compilation of the Official Record of the Battle of Jutland and the Reason It Was not Published* (hereafter cited as *Facts Dealing*), 1928, in *JP*, vol. 2, pp.464-465.



ティーは、その内容各所に難色を示し、修正を要求する。しかし、ビーティーの要求に対し、ハーパーは自ら正しいと信ずる記述への修正要求に対しては強く抵抗し<sup>30)</sup>、ハーパー・リコードの完成・公表は延期されていくことになる。

海軍省の外では、元海軍将校で下院議員であるベレアーズ（Carlyon Wilfroy Bellairs）が1920年に『ジウトランド海戦：種蒔きと刈り取り（*The Battle of Jutland; The Sowing and the Reaping*）』を著して、ジェリコーの艦隊指揮を批判した。ベレアーズは、戦闘時間を確保するためにも戦艦隊は右翼先行展開をなすべきであったとし、また、敵撃滅の機会を逃したも<sup>31)</sup>のとして、敵から遠ざかるかたちでの魚雷退避を批判している<sup>31)</sup>。

ビーティーは、ハーパー・リコードの修正を求めるなかで、自ら指揮していた巡洋戦艦隊の行動を高く評価し、戦艦隊のそれを、つまりはジェリコーの指揮を過小評価する傾向を示した。その傾向に対し、ハーパーは事実を歪めるものとして反発し、ジェリコーに同情していた<sup>32)</sup>。また時の海相ロング（Walter Hulme Long）も公式記録問題に関し、ハーパーと接触をはじめた。ロングは、公式記録問題がジェリコーの将来に悪影響を与えるのではないかと懸念していた<sup>33)</sup>。

ジェリコー自身も海軍省におけるジウトランド海戦の公式記録作成の動

30) Captain J. E. T. Harper to ACNS, 20 Dec. 1919, in *The Beatty Papers: Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Earl Beatty*, vol. 2, ed., Bryan Ranft (Aldershot: Scolar Press, 1993) (hereafter cited as *BP*), vol.2, pp.433-437; Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, pp.465-476.

31) Bellairs, *The Battle of Jutland*, pp.151-156, 187-188, 200-203, 271.

ベレアーズは、著書『ジウトランド海戦』の序文において、幕僚経験の不足ゆえにハーパーがジウトランド海戦の記録作成者としては不適格だと示唆している。これに対し、ハーパーは名誉棄損での訴訟を考えたほどであった。ベレアーズは親ビーティーの姿勢が明らかな人物であり、この彼の著作の巻頭にはビーティーが一文を寄せているが、ハーパーは、ベレアーズの著述にビーティーによる資料面での便宜供与があったと考えている。 *Ibid.*, pp.v, xi-xii; Harper, *Facts Dealing, JP*, vol.2, pp.462, 466.

32) *Ibid.*, pp.462, 463.

33) *Ibid.*, pp.466-467.

きを知っており<sup>34)</sup>、1919年3月9日にはその作成上の問題についてハーパーから相談を受けている。その際、ジェリコーは公表前に公式記録を読みたくはないと答えている<sup>35)</sup>。公式記録は何者の修正も受けることなく公表されるべきというのが彼の見解であった。しかし、その後に再び海相ロングより求められたジェリコーは、公式記録案を読むことに同意し、その結果、いくつかの修正案に強く反発した<sup>36)</sup>。さらに、公式記録に付そうとして作成されていた前文案についても、不正確かつ戦艦隊の働きを過小評価するものとして反対した。海軍省による公式記録作成に不安を感じたジェリコーは、ハーパー・リコードがいかなるかたちで公表されるのか知るまではニューージーランド総督へ就任できないとの意をロングと植民地相ミルナー（Alfred Milner）に表した。ジェリコーは、彼への照会なしに公式記録の修正はなされないとの保証をロングから得て、ニューージーランドへと赴任した<sup>37)</sup>。

ピーティーとジェリコーの双方が容認できる公式記録の作成は困難であり、またハーパーの抵抗もあって、公式記録完成の目処は立たなかった<sup>38)</sup>。この状況下に海軍省は、ハーパー・リコードの公表を断念し、帝国防衛委員会（Committee of Imperial Defence）による大戦公刊戦史『海軍作戦（*Naval Operations*）』の作成にあたっている海軍史家コーベット（Julian Stafford Corbett）にハーパー・リコードを資料として提供することにした<sup>39)</sup>。このことは1920年10月に議会で公表されたが、ジュトランド

34) Jellicoe to Lieut-Commander Oswald Frewen, 12 Feb. 1920, *JP*, vol.2, p.406. このフルーウェンはハーパーの下で公式記録作成にあたったスタッフの一人である。ジェリコーは彼と親しく文通していた。

35) Harper, *Facts Dealing*, *ibid.*, pp.467-468.

36) 公式記録の修正およびその前文案に対するジェリコーの見解については下記を参照。Extract from Jellicoe's "Remarks on Important Naval Matters", *Dealing with the Harper Record*, 1920 and Jellicoe to Long, 5 July 1920, *ibid.*, pp.405, 406-410.

37) *Ibid.*, p.405.

38) ピーティーの圧力に抵抗を続けたハーパーは、神経衰弱症に追い込まれたともいわれる。Lieutenant Cdr O. Frewen to Evan-Thomas, 22 Feb. 1927, *BP*, vol.2, p.476.

39) Corbett to Jellicoe, 13 June 1921, *JP*, vol.2, p.411.

海戦公式記録の早期公表を期待していた議会や社会には不満が生じた<sup>40)</sup>。同年12月に『ジュトランド海戦1916年5月30日～6月1日：付録付公式文書集 (*Battle of Jutland 30th May to 1st June 1916: Official Despatches with Appendices*)』が議会に公表されたものの、これは海戦に関する各種報告や記録を集成したものにすぎなかった<sup>41)</sup>。

コーベットはジェリコーと親しい関係にあり、『海軍作戦』第3巻におけるジュトランド海戦の叙述についても彼の助言を受けていた<sup>42)</sup>。それゆえにではないが、『海軍作戦』第3巻は、ジュトランド海戦におけるジェリコーの艦隊指揮に肯定的であった<sup>43)</sup>。コーベットは1922年9月に急逝するが、『海軍作戦』第3巻の原稿はすでに完成していた。海軍省はその内容に不満であり、ジェリコーは海軍省の介入による内容の改変を懸念した<sup>44)</sup>。結局、翌年に『海軍作戦』第3巻は大きな修正のないまま公表され

40) e.g., Daily Mail Leading Article 'The Jutland Hush-Up,' 28 Oct. 1920, *BP*, vol.2, pp.452-453; Harper, *Facts Dealing*, *JP*, vol.2, pp.476-477.

41) *Battle of Jutland 30th May to 1st June 1916: Official Despatches with Appendices*, Command Paper 1068, 1920.

42) Corbett to Jellicoe, 13 June 1921, 10 Mar., 19 June, 18 July, 3 and 20 Aug. 1922, *JP*, vol.2, pp.411, 413-416.

43) Julian Stafford Corbett, *Naval Operations*, vol. 3 (London: Longmans, Green, 1923), chaps. 16-21. cf. Corbett to Jellicoe, 19 June 1922, *JP*, vol.2, p.414.

コーベットの『海軍作戦』第3巻をめぐる問題については下記を参照。Donald Mackenzie Schurman, *Julian S. Corbett 1854-1922: Historian of British Maritime Policy from Drake to Jellicoe* (London: Royal Historical Society, 1981), pp.189-194.

この初版では機密上の問題から、ジュトランド海戦に際して海軍省が有したドイツ側無線の解読情報の全面的な公開はできなかった。それらの情報がジェリコーへ適切に提供されていれば、彼は大海艦隊の撤退コースを正しく推測し、その捕捉に成功しただろうと、コーベットは考えていた。それら解読情報は、ジュトランド海戦に関するドイツ側の公的資料と合わせて、1940年に出版の第2版において収録された。Corbett, *Naval Operations*, vol.3, 2nd ed. (1940), pp.vii, 414n, 442; Corbett to Jellicoe, 19 June and 3 Aug. 1922, *JP*, vol.2, pp.414, 415; Schurman, *Julian S. Corbett*, pp.192-193.

44) Colonel E. Y. Daniel, Secretary of the Historical Section of the Committee of Imperial Defence, to Jellicoe, 2 Oct. 1922 and Madden to Jellicoe, 14 and 25 Feb. 1923, *JP*, vol.2, pp.417, 437, 438-439.

ジェリコーは、コーベットの遺した『海軍作戦』第3巻の内容が海軍省により歪められたなら、手もとにあるコーベットの原稿を自ら出版しようとも考えていた。

たが、海軍省は、そこに説かれる原則や見解と海軍省の見解には対立点があるとする旨の但し書きを巻頭に挿入させた<sup>45)</sup>。

一方、海軍省の内部では、ハーバー・リコードに代わるべき別の公式記録、つまり「海軍幕僚評価 (Naval Staff Appreciation)」の作成がデュワー大佐兄弟 (Kenneth Gilbert Balmain Dewar, Alfred Charles Dewar) により進められ、1921年秋に完成した<sup>46)</sup>。これを読んだコーベットは、事実関係に誤りが多く、海軍省が公表すべきでない、ばかげた (grotesque) ものであると感じている<sup>47)</sup>。「海軍幕僚評価」は、内容がジェリコーの指揮に対して非常に批判的であったため、海軍部内でさえ限られた範囲にしか配付されなかった<sup>48)</sup>。

より穏当な内容で、より広い範囲に公表できる「海軍幕僚評価」の要約版がつくられることになり、1922年3月に「ジュトランド海戦報告 (Narrative of the Battle of Jutland)」の原案が作成された<sup>49)</sup>。これは7月末にニュージーランドのジェリコーにも届けられたが、彼はそれを事実誤認に満ち、ほとんど戦艦隊の視点を踏まえていない、巡洋戦艦隊の眼で見た、純粋に巡洋戦艦隊の報告書だと感じ、その内容に強く抗議した<sup>50)</sup>。彼

---

Covering letter to Archibald Hurd, Extracts from Jellicoe's proposed revised version of a new Appendix to "The Grand Fleet", 27 Nov. 1922, *ibid.*, p.420.

45) Note by the Lords Commissioners of the Admiralty, in Corbett, *Naval Operations*, vol.3, 1st ed., front endpaper.

46) 「海軍幕僚評価」については下記を参照。Gordon, *Rules of the Game*, pp.545-546; Roskill, *Beatty*, pp.332-334. cf. K. G. B. Dewar, "Battle of Jutland," I-III, *The Naval Review*, 47-4, 48-1, 2 (Oct. 1959, Jan. and Apr. 1960).

47) Corbett to Jellicoe, 10 Mar. 18 July 1922, *JP*, vol.2, pp.413, 414-415.

48) Memorandum by Keyes and Chatfield, 14 Aug. 1922, in *The Keyes Papers: Selections from the Private and Official Correspondence of Admiral of the Fleet Baron Keyes of Zeebrugge*, vol.2, ed. Paul G. Halpern (London: George Allen & Unwin, 1980) (hereafter cited as *KP*), pp.75-76.

49) *Narrative of the Battle of Jutland* (H.M.S.O., 1924); Roskill, *Earl Beatty*, p.333.

50) Jellicoe to Frewen, 25 Aug. and 6 Nov. 1922, Jellicoe to the Secretary of the Admiralty, 27 Nov. 1922 and Extract from Jellicoe's "Remarks on Important Naval Matters", Dealing with the Dispute over the Admiralty Narrative of Jutland, 1923, *JP*, vol.2, pp.416-417, 417-418, 419-420, 439-441; Jellicoe to Frewen, 12 Feb. 1923, *BP*, vol.2, pp.460-461. cf. *Narrative of the Battle of Jutland*, pp.12, 24, 27, 106-113.

は自ら提示した修正なくしての公表に反対したが、それでも公表される場合には、自らの見解を報告書に付すように求めた。結局、彼の反論は「ジウトランド海戦報告」に付録Gとして収録されることになる。

彼は、この公式記録が、海戦当時の艦隊司令長官には不明であった、大戦後に判明した事実からもたらされる暗示や推論を含んでいると主張した<sup>51)</sup>。「ジウトランド海戦報告」付録の彼の反論は13点にわたるが、海戦当時の司令長官たる彼が経験した情報面での困難とその影響をもっと正しく伝えるべきという主張などとともに、巡洋戦艦隊のビーティーの指揮下に第5戦艦戦隊を率いたエヴァン・トーマスの弁護も強く展開されている<sup>52)</sup>。公式記録では、第5戦艦戦隊が巡洋戦艦隊に伴っての反転に2度も遅れたがために、海戦第1段階の南方への追撃における巡洋戦艦隊と第2段階の北方への撤退における第5戦艦戦隊は苦戦したと暗示されている、とジェリコーは感じたのである。海軍省は、ジェリコーの反論に対し、報告書内容の方がよりいっそう資料に適合していると確信するという旨の一文を付録序文として挿入し、またたとえば、この報告書は事実に基づいており、暗示や推論は厳しく排されていると述べるなど、ジェリコーの批判への反論を脚注として付け加えた<sup>53)</sup>。そして、1924年6月に「ジウトランド海戦報告」は公表された。

海軍省の公式記録である「ジウトランド海戦報告」が公表された以上、当然ながらそれ以後にジェリコーがジウトランド海戦の海軍省公式記録に影響をおよぼすことはできなくなった。彼は回顧録『大艦隊』の第2版出版を意図しており、それが実現したなら、「ジウトランド海戦報告」に対する反論の表明ともなりえたであろうが、大戦に対する社会の関心が減少

---

51) Extract from Jellicoe's "Remarks on Important Naval Matters", *Dealing with the Dispute over the Admiralty Narrative of Jutland, 1923, JP, vol.2, p.441; Narrative of the Battle of Jutland, p.106.*

52) Extract from Jellicoe's "Remarks on Important Naval Matters", *Dealing with the Dispute over the Admiralty Narrative of Jutland, 1923, A Sequence of Letters from Jellicoe to Evan-Thomas, 8 and 29 Oct. 1923, 10 Feb. 1924 and Jellicoe to Lady Evan-Thomas, 3 Aug. 1924, JP, vol.2, pp.440, 441-444; Narrative of the Battle of Jutland, pp.106-107.*

53) *Ibid.*, p.106.

しているとの出版社（Cassel）の判断により、それは実現しなかった<sup>54)</sup>。

しかし、「ジュトランド海戦報告」の公表により、ジュトランド論争が終息したわけではなかった。1925年には、ベーコン（Reginald Hugh Spencer Bacon）大将がジェリコーの艦隊指揮を強く支持してビーティーを批判する内容の『ジュトランド・スキャンダル（*The Jutland Scandal*）』を出版した。これは親ビーティーの姿勢の強いジャーナリストであるフィルソン・ヤング（Alexander Bell Filson Young）によるサンデー・エクスプレス（*Sunday Express*）紙の記事に刺激されて書かれたものだった<sup>55)</sup>。ベーコンはジュトランド論争における代表的なジェリコー支持者であり、のちにジェリコーの伝記（*The life of John Rushworth, Earl Jellicoe*）を著したことで知られる<sup>56)</sup>。なお、ベーコンは、『ジュトランド・スキャンダル』の著述にジェリコーがまったく関与していないことを、わざわざ明記している<sup>57)</sup>。

1927年に出版されたチャーチル（Winston Leonard Spencer-Churchill）の『世界の危機（*The World Crisis*）』第3巻もまたジュトランド論争を活発化させた。チャーチルは大艦隊司令長官というジェリコーの重責に理解を示しつつも、司令長官に指揮統制機能を集中するジェリコーの硬直した指揮を論難し、先述のように戦艦隊は左翼先行展開ではなく中央先行展開をなすべきだったと主張するなどジェリコーの艦隊指揮に批判的であり、その一方でビーティーを評価するものだった<sup>58)</sup>。このようなチャーチルの

54) Extracts from Jellicoe's Proposed Revised Version of a New Appendix to "*The Grand Fleet*", 27 Nov. 1922, *JP*, vol.2, pp.420-437; Patterson, *Jellicoe*, pp.242-244.

55) Reginald Hugh Spencer Bacon, *The Jutland Scandal*, rev. ed. (1925; London: Hutchinson, 1933), p.xiv.

この著作に対し、ヤングは、自らの同意なくして記事が引用されている著作権違反だとしてベーコンとの間で訴訟を起こした。Silvester Mazzarella, 'Filson Young: The first media man (1876-1938)'

[<http://richarddnorth.com/archived-sites/filsonyoung/biography/part-7-making-airwaves-1924-30/37-the-jutland-controversy/>]. (最終検索日：2015年10月25日)

56) Reginald Hugh Spencer Bacon, *The life of John Rushworth, Earl Jellicoe* (London: Cassell, 1936).

57) Bacon, *The Jutland Scandal*, p.xv.

58) Churchill, *The World Crisis*, vol.3, pt.1, pp.129-130, 135-137, 147-150, 169-170.

見解に対しては、ベーコンなどジェリコー支持者による批判がなされることになる<sup>59)</sup>。

また、『世界の危機』第3巻は、エヴァン・トーマスをジウトランド論争へと駆り立てることにもなった。「ジウトランド海戦報告」が編集されているころ、ジェリコーからの警告もあって、エヴァン・トーマスは、「ジウトランド海戦報告」で二度の第5戦艦戦隊の反転遅延の責任が彼にあるとするような記述がなされていることに対し抗議行動に出たが、それは功を奏さず、かえってその衝撃から体をこわして退役のやむなきに至っていた<sup>60)</sup>。しかし、『世界の危機』第3巻も同様に彼に反転遅延の責任を負わせているのに刺激され<sup>61)</sup>、タイムズ (*The Times*) 紙に『世界の危機』への批判を投稿し、彼の戦隊の反転遅延をもたらした巡洋戦艦隊旗艦ライオンの信号伝達の失敗を明確に主張したのである<sup>62)</sup>。

同じ1927年には、退役したハーパーも『ジウトランド海戦の真実 (*The Truth about Jutland*)』を出版し、ジウトランド海戦におけるジェリコーの艦隊指揮を支持して、ビーティーのそれを批判し、またビーティー派のベレアーズやチャーチルなどの主張を批判した<sup>63)</sup>。このハーパーの動きが契機になったものか、ビーティーの退役を近くに控えていた海軍省は、ハー

59) Reginald Hugh Spencer Bacon, 'Mr. Churchill and Jutland,' in Lord Sydenham of Combe, Reginald Bacon, Frederick Maurice, W.D. Bird, Charles Oman, *The World Crisis by Winston Churchill: A Criticism* (1927; London: Hutchinson, 1928), chap. V; idem., *The Jutland Scandal*, chap. XII; John Ernest Troyte Harper, *The Truth about Jutland* (London: John Murray, 1927), chap.X.

60) Jellicoe to Sir Hugh Evan-Thomas, 3 June 1922, A Sequence of Letters from Jellicoe to Evan-Thomas, 8 and 29 Oct 1923, *JP*, vol.2, pp.413, 442; Evan-Thomas to Haggard, 14 Aug. 1923, and Evan-Thomas to Jellicoe, 30 June 1926, *BP*, vol.2, pp.463-464, 473; *Rules of the Game*, pp.548-550.

61) Churchill, *The World Crisis*, vol.3, pt.1, pp.123-124, 133.

62) Hugh Evan-Thomas, "The Battle of Jutland," *The Times*, 16 Feb. 1927.

63) Harper, *The Truth about Jutland*, chaps.IX-X.

ハーパーは現役延長の当初の見通しに反して1927年に退役となったが、彼はこの現役延長の取消をビーティー軍令部長の意図によるものと考えた。しかし、実際には、第三海軍卿兼監督官 (Third Sea Lord and Controller of the Navy) だったチャトフィールドのためであった。Harper, *Facts Dealing*, *JP*, vol.2, p.483; Roskill, *Earl Beatty*, p.325.

パー・リコード、つまり「ジュトランド海戦公式記録複製（Reproduction of the Record of the Battle of Jutland）」の公表を決定した<sup>64)</sup>。この展開には、ビーティーを後継して軍令部長に就任するのが、ジェリコーと親しい関係にあるマッデン（Charles Edward Madden）であったことも影響していたかもしれない<sup>65)</sup>。

#### 4. ジュトランド論争へのジェリコーの影響

ジュトランド論争は、ジュトランド海戦の不満足な結果の責任の所在をめぐって生じたものであり、海軍省のジュトランド海戦公式記録の作成問題にもなって展開した。ジュトランド海戦で被った大損害を考えれば、たとえ速やかにハーパー・リコードが公表されていたとしても、やはり論争の発生は避けられなかっただろう。しかし、その場合、軍令部長ビーティーやジェリコーが公式記録作成問題に関わることはなく、少なくとも海軍省が公式記録をめぐる論争の主要な舞台となることもなく、ジュトランド論争の展開は史実より抑制されたものになっていただろう。

ハーパー・リコードの公表の遅延と未公表決定は、そこになんらかの事実隠蔽があるのではないかとの疑惑を社会に生じさせ、ジュトランド海戦

64) *Reproduction of the Record of the Battle of Jutland*, Command Paper 2870, 1927. これは、ハーパーが作成した最初の版が海軍省に残っていなかったため、最も修正の少ない版を選んで公表したものである。Beatty: *Minute on the Publication of the Harper Record*, 10 May 1927, *BP*, vol.2, pp.477-478; Harper, *Facts Dealing*, *JP*, vol.2, p.484.

65) マッデンは、ジェリコーの義妹の夫で、かつて大艦隊司令長官だったジェリコーのもとで参謀長を務めた。たとえビーティーがハーパー・リコードを公表しなかったとしても、ジェリコーと親しく、ビーティー軍令部長下の海軍省におけるジュトランド海戦公式記録問題の進展に批判的だった次期軍令部長のマッデンにより公表されることはありうろと思われただろう。Madden to Jellicoe, 14 and 25 Feb. 1923, *JP*, vol.2, pp.437, 438-439; Dewar, "Battle of Jutland," III, p.146; Gordon, *Rules of the Game*, p.558.

ビーティーからマッデンへの軍令部長の継承には、ジュトランド論争にまつわり海軍内に生じた亀裂の修復意図が感じられる。Keyes to Beatty, 29 Aug. 1926 and Keyes to Alexander, 3 Mar. 1930, *KP*, vol.2, pp.186, 268.



公式記録問題への関心をさらに高めた<sup>66)</sup>。この意味で、ハーバー・リコードの速やかな公表を妨げたビーティーは、ジウトランド論争に大きな影響を与えたといわざるをえない<sup>67)</sup>。以後も彼は海軍省のジウトランド海戦公式記録作成問題に介入しつづけ、それに対応してのジェリコーの介入をまねき、ジウトランド論争の激化をもたらした。最終的にビーティー軍令部長下の海軍省は「ジウトランド海戦報告」を公表したが、それにジェリコーの反論が付録とされたことから理解されるように、その妥当性に一般的同意は得られず<sup>68)</sup>、その後のジウトランド論争を抑止しはしなかった。

ビーティー軍令部長下の海軍省が作成するジウトランド海戦公式記録には、その海戦に彼が直率した巡洋戦艦隊の海戦認識が、つまりビーティーのそれが強く反映された。そのビーティーの認識とは、大損害を被りつつも善戦してドイツ大海艦隊の誘引に成功した巡洋戦艦隊と、その好機を無にしてしまった、ほとんど無損害の戦艦隊というものであった<sup>69)</sup>。そのような彼にとっての真実は、ジェリコーの海戦認識とは矛盾するものであった<sup>70)</sup>。

66) 'The Jutland Hush-Up,' 28 Oct. 1920, *BP*, vol.2, pp.452-453; Bacon, *The Jutland Scandal*, p.142; idem, *The life of John Rushworth, Earl Jellicoe*, pp.437-438.

67) ハーバー・リコード作成に対するビーティーの介入について記したハーバーの個人文書 (Harper, *Facts Dealing*) が海軍記録協会 (The Navy Records Society) によって1968年に出版の『ジェリコー文書集 (Patterson, *The Jellicoe Papers*)』第2巻に収録される際、第2代ビーティー伯 (David Field Beatty) はそれに強く反対した。実際、この公表は反響をよび起した。Barry Gough, *Historical Dreadnoughts: Arthur Marder, Stephen Roskill and Battles of Naval History* (Bamsley: Seaforth, 2010), pp.260-269; Basil Gringell, "Beatty Shown as Falsifier of Jutland Record," *The Times*, 14 Dec. 1968.

68) e.g. Bacon, *The Jutland Scandal*, pp.143-149; Frederic Charles Dreyer, *The Sea Heritage: A Study of Maritime Warfare* (London: Museum Press, 1955), pp. 184-185.

69) 臨時に巡洋戦艦隊に属した第5戦艦戦隊の103名は別として、戦艦隊の戦艦から出た戦死者は、戦艦マールバラの2名だけである。一方、戦艦隊に編入されていた第3巡洋戦艦戦隊のインヴィンシブルの戦死者1026名は別にしても、巡洋戦艦の戦死者は、2,428名を数えた。N. J. M. Campbell, *Jutland: An Analysis of the Fighting* (1986; New York: Lyons Press, 1998), pp.338, 340.

70) ビーティーのジウトランド論争との関わりについては、拙稿「ジウトランド論争とビーティー」を参照。

ビーティーと違ってジュトランド海戦の公式記録作成の時期に、もうすでに海軍の主流を外れていたジェリコーは、その作成作業に大きな影響を与えられなかった。しかし、ハーパーやロングとの交流を通してハーパー・リコードの修正に反対したことで、その公表中止に間接的な影響をおよぼしたといえる<sup>71)</sup>。また、最終的な海軍省の公式記録である「ジュトランド海戦報告」へも、彼の見解は十分に反映されなかったものの、付録というかたちでそれを併載させることはできた。海軍省もジェリコーの存在を無視することはできなかつたのである。

さらに、海軍省の公式記録ではないとはいえ、帝国防衛委員会による公刊戦史『海軍作戦』第3巻のジュトランド海戦についての叙述にも、ジェリコーは影響を与えた。コーベットはジェリコーの助言を参考に原稿を修正し、内容各所についてジェリコーの同意が得られることを喜んでいった<sup>72)</sup>。その親交を通してジェリコーが自らの見解を採り入れるようコーベットに働きかけたわけではないが<sup>73)</sup>、ジュトランド海戦における自らの艦隊指揮や状況判断について十分な説明をコーベットになしえたという意味で、ジェリコーが『海軍作戦』第3巻に影響を与えたとはいえよう。実際、その著作に接したジェリコーは、ジュトランド海戦での自らの行動や意図についてコーベットが深く理解していると賞賛している<sup>74)</sup>。『海軍作戦』第3巻の叙述は、ジェリコーにとって満足できるものとなったのである。ジュトランド海戦史の編修事業に対するジェリコーの影響力は、限定的・間接的であったとしても、小さなものではなかつた。

ジェリコーの行動だけではなく、彼の存在自体もジュトランド論争の激化に影響したといえる。彼は小さなことでもおろそかにせず全てを配慮し、ために全てが彼に集中されるという中央統制の傾向を強くもつ人物であり、それが彼の艦隊指揮にも、そしてジュトランド海戦の展開にも影響

71) Roskill, *Earl Beatty*, pp.328, 331-332.

72) Corbett to Jellicoe, 13 June 1921, 10 Mar., 19 June, 18 July, 3 and 20 Aug. 1922, *JP*, vol.2, pp.411, 413-416.

73) Schurman, *Julian S. Corbett*, pp.186-187.

74) Bacon, *The life of John Rushworth, Earl Jellicoe*, p.442; Patterson, *Jellicoe*, pp.241-242.

した<sup>75)</sup>。しかし、彼は人格的に非常に優れた人物であり、分け隔てなく周囲に接する親しみ深い性格から、階級の上下を問わず、大艦隊将兵をはじめ人々に広く深く敬愛されていた<sup>76)</sup>。ジュトランド海戦が不首尾な結果に終わったのちにも、その敬愛の情は微動だにせず、彼が軍令部長となるべく大艦隊を離れる際には多くの将兵が涙を流して別れを惜しみ、以後も彼への敬愛の情をもちつづけた<sup>77)</sup>。そのように尊敬されるジェリコーが不当に貶められていると感じた人々は、ジェリコー擁護の声を当然に発した。ベーコンはそのような反発の急先鋒であり、ハーパーもジェリコーに同情していたことは先述の通りである<sup>78)</sup>。ハーパーは、ジェリコーが不正 (unfair) かつ不当 (unwarrantable) に、また矮小化 (be-littled) されて批判されながらも、「高潔な心持から、この試練の時に完全な静黙をつらぬいている」と感じていた<sup>79)</sup>。海相ロングも、ジェリコーの立場への悪影響を懸念して、ビーティーに対した。また、ジェリコーと親しい関係にあるマッデンも、海軍省のジェリコーへの評価に不満であった<sup>80)</sup>。彼は1927年にビーティーを後継して軍令部長となると、「海軍幕僚評価」を廃棄し

75) Andrew Gordon, "Military Transformation in Long Periods of Peace: The Victorian Royal Navy," in *The Past as Prologue: The Importance of History to the Military Profession*, eds. Williamson Murray and Richard Hart Sinnreich (London: Cambridge University Press, 2006), pp.163-166; John Horsfield, *The Art of Leadership in War - The Royal Navy from the Age of Nelson to the End of World War II* (London: Greenwood Press, 1980), pp.115-118.

この問題の背景は、Gordon, *Rules of the Game* が詳しい。

76) Captain Colin Nicholson (R.N.R., retired) to Admiral Sir Reginald Bacon, 29 Nov. 1935, *JP*, vol.2, p.456; Gordon, *Rules of the Game*, pp.17-19; Horsfield, *The Art of Leadership in War*, pp.113-115.

77) Commodore Lionel Halsey, Captain of the Fleet, to Jellicoe, 29 Nov. 1916, Captain F. C. Dreyer, Director of Naval Ordnance, to Jellicoe, 30 May and Surgeon-Captain Robert Hill to Jellicoe, 1 Aug. 1917, *JP*, vol.2, pp.105-106, 165, 192; Gordon, *Rules of the Game*, pp.521, 523.

78) ハーパーはニュージーランド出身であり、ジェリコーがニュージーランド総督となったこともハーパーのジェリコー擁護の気持ちを強めたかもしれない。 *Ibid.*, pp.541-542.

79) Harper, *Facts Dealing*, *JP*, vol.2, pp.462, 463.

80) Madden to Jellicoe, 14 and 25 Feb. 1923, *ibid.*, pp.437, 438-439.

ている<sup>81)</sup>。ピーティーが軍令部長としてジュトランド海戦の公式記録に対し大きな影響力を行使し、ジェリコーに批判的な姿勢を示すにつれて、ジェリコーを支持する勢力も無視しがたい強さで反発したのである。「海軍幕僚評価」の場合に見られるように、ジェリコーへの批判は海軍の分裂すら危惧させるものだった<sup>82)</sup>。

ジュトランド海戦で大艦隊が大海艦隊の撃滅に失敗したのは事実だが、敗北したわけではない。しかし、ネルソン（Horatio Nelson）のトラファルガー海戦の勝利の再来を望んでいた社会の期待に大艦隊は応えることができず、その落胆ゆえにジュトランド論争の発生は必然的なことだった。ジュトランド海戦の戦果を不十分だったと考える者は、当然に大艦隊司令長官だったジェリコーの艦隊指揮を批判した。より良い戦果を得るためには、より良い艦隊指揮がなされねばならず、ジェリコーの艦隊指揮には至らぬ点があるはずだった。

しかし、ジュトランド海戦におけるジェリコーの艦隊指揮の是非は海戦の勝敗自体と同じく非常に判定しにくいものであり、その是非判断の難しさがジェリコーへの賛否両論を生じさせ、論争を長期化させたともいえよう。そうした賛否の分かれる争点の代表例が戦艦隊の左翼先行展開と敵から遠ざかるかたちでの魚雷退避の是非である。もしジュトランド海戦においてジェリコーにもうしばらくの日照時間の余裕があったなら、彼は大海艦隊に大打撃を与えることに成功し、たとえ左翼先行展開と敵から遠ざかるかたちでの魚雷退避をおこなったとしても、かえって巧みな艦隊運動として誰からも賞賛されていたかもしれない<sup>83)</sup>。それらの艦隊指揮自体に絶対的な是非を判定することは難しいのである。それは、たとえばベレーズやチャーチルなどにとって拙策に見えたとしても、ハーパーやベーコンにとっては最善策なのである<sup>84)</sup>。

英帝国防衛の要である大艦隊を指揮するジェリコーは、チャーチル曰

81) Dewar, "Battle of Jutland," III, p.146.

82) Memorandum by Keyes and Chatfield, 14 Aug. 1922, *KP*, vol.2, p.75.

83) Gordon, *Rules of the Game*, p.463.

84) Bacon, *The Jutland Scandal*, pp.194-206, 218-221; Harper, *The Truth about Jutland*, pp.161-167, 172-177.

く、まさに敵味方両陣営のうち半日で戦争を敗北させうる唯一の人物であり<sup>85)</sup>、英帝国の命運を担う重責の下で、艦隊戦力の保全を極めて重視していた。大艦隊司令長官に就任以来、ジェリコーが形成した、大艦隊の運用方針である「大艦隊海戦要務令 (the Grand Fleet Battle Orders)」は、防衛的色彩の強い慎重な艦隊運用を基軸とするものであり、特に水雷兵器に対して強い警戒を示していた<sup>86)</sup>。その枠組においてジェリコーはジユトランド海戦を戦い、大艦隊を過度の危険にさらすことなく、大海艦隊を逃げ去らしめた。彼の艦隊指揮には決定的失敗などなく、彼は自ら形成した艦隊戦術の枠組を守って戦っただけなのである。敵主力艦隊撃滅は悲願であったとしても、水雷兵器の危険を顧みず大海艦隊を猛追することは、ジユトランド海戦以前より艦隊指揮の選択肢として彼にはなかったのである<sup>87)</sup>。既定の戦闘方針に従って戦った結果がジユトランド海戦の戦果であり、その結果以外の戦果を得るためには、ゴードンが巧みに表現するように、ゲームのルール自体を変える必要があったのである<sup>88)</sup>。

自ら定めた戦術的枠組に拘束されながらも、彼はジユトランド海戦にあって善戦したと評価できよう。直率する戦艦だけでも28隻、総数では150隻もの大艦隊艦艇を指揮し、敵情の詳細不明ななか、大海艦隊を二度もT字を形成するかたちにとらえて苦境に追い込むなど、ジェリコーの艦隊指揮は巧みだったといわざるをえない。第二次世界大戦において地中海艦隊を率いて勇名をはせた、イギリス海軍を代表する提督の一人であるカニンガム (Andrew Browne Cunningham) 元帥は、1963年に没する前に、ジェリコーのように艦隊を展開できる感覚があればよかったのに、と記したという<sup>89)</sup>。

また、マウントバッテン (Louis Francis Albert Victor Nicholas Mountbatten) 卿は、ジユトランド海戦後に巡洋戦艦隊に所属してジェリコーや戦艦隊に対する批判的雰囲気を共有したが、1935年のジェリコーの死の前に彼と

85) Churchill, *The World Crisis*, vol.3, pt.1, p.112.

86) Marder, *FDSF*, vol.3, chap.I.

87) Jellicoe to the Secretary of the Admiralty, 30 Oct. 1914, *JP*, vol.1, p.76.

88) Gordon, *Rules of the Game*, pp.564-565.

89) Marder, *FDSF*, vol.3, p.105.

会ってからは、ジェリコーを高く評価するようになった。しかし、それでもなお、ジュトランド海戦においてジェリコーが積極的に追撃してくれたらというマウントバッテンの思いは変わらなかったともいう<sup>90)</sup>。そのようなジェリコーに対する複雑な心境こそ、ジュトランド論争の基層にあって、論争を展開させる力となったといえるだろう。

## おわりに

ジェリコーの人生においてジュトランド海戦は非常に大きな意味を持ち、1917年の軍令部長解任劇とともに、海軍軍人としての彼の評価に深い陰影をもたらしている。ジェリコー自身もジュトランド海戦の結果には失意を覚えていた<sup>91)</sup>。ピーティーは、ジェリコーがジュトランド海戦直後には大勝利の好機を逸してしまったと落胆しており、海戦で最善を尽くしたと思いはじめるのは、それからのちのことであると述べている<sup>92)</sup>。ジュトランド論争のなかでジェリコーへの反感を募らせていたピーティーの発言をそのまま受け入れることはできないが、程度はどうあれ、ジュトランド海戦はジェリコーにとって明るい記憶とはなりえなかった。

しかし、ジェリコーがジュトランド海戦後にも慎重な艦隊指揮、たとえば水雷兵器に対する警戒姿勢を継続したことを考えれば、ジュトランド海戦の不首尾な結果が自らの艦隊指揮にあったと彼が結論していたとは考えにくい<sup>93)</sup>。ジェリコーは、ジュトランド海戦でも、その後の艦隊指揮にも、自らの方針を曲げなかったのである。

第一次世界大戦を戦ったイギリス海軍軍人たちは、ネルソンとトラファ

90) Gordon, *Rules of the Game*, pp.509, 564; Adrian Smith, *Mountbatten: Apprentice War Lord* (London, New York: I. B. Tauris, 2010), pp.61-62.

91) Marder, *FDSF*, vol.3, pp.237-238; Patterson, *Jellicoe*, pp.134-135.

92) L. S. Amery: *Diary*, 25 June 1923, *BP*, vol.2, pp.461-462.

93) Patterson, *JP*, vol.1, p.214.

1916年8月にも、出撃した大海艦隊を大艦隊は捕捉しようとしたが、結局、大海艦隊は撤退して艦隊戦は生起しなかった。このときもジェリコーは水雷兵器の危険を懸念して敵から離れるかたちの転針をおこない、のちに非難されることになった。Marder, *FDSF*, vol.3, pp.285-297; Patterson, *Jellicoe*, pp.140-143.

ルガー海戦の影の下で戦った。イギリス国民はネルソンとトラファルガーの勝利の再来を強く期待し、それを基準として海軍を見ていた<sup>94)</sup>。大艦隊でジェリコーの幕僚を務めたベスト (Matthew Best) 中佐は、職務上でネルソンをしのがないまでもジェリコーは彼と等しく、しかもネルソンの短所を有してはいなかった、と激賞している<sup>95)</sup>。しかし、長らくジェリコーの後援者であったフィッシャー (John Arbuthnot Fisher) はジェリコーを評して、不服従というもの以外はネルソンの特質の全てを備えているが、その不服従こそがネルソンの偉大な業績につながるものであった、と述べている<sup>96)</sup>。ネルソンと違い、ジェリコーには戦機とみれば命令や規定戦術を無視するような戦術的独創性はなく、彼は既定の方針に従ってジウトランド海戦を戦い、結果的にトラファルガーの再来を果たせなかった<sup>97)</sup>。もしネルソンのごとく、好機と見れば危険を冒してでも、また規定戦術を無視してでも突進していたならば、ジウトランド海戦の結果もまた違ったものになっていたかもしれない。

しかし、規定戦術に不服従ではなかったがゆえにジェリコーを批判するのは矛盾であり、あまりに酷でもあろう。彼はトラファルガー的大勝利を得られなかったが、過度の危険を冒さずにイギリスの海上優勢の維持、つまりは大艦隊の戦力優勢の保全という最高位の戦略的要求を満たしつづけた。大戦後においても彼を慕って擁護する者が多数存在したことは、ジェリコーを敗者や失敗者とみなす見解が一般化されなかったことを表している。ジェリコーは、毀誉褒貶の激しい提督であるとはいえ、第一次世界大戦におけるイギリス勝利の立役者の一人なのである。

ジウトランド論争で対立的関係となったビーティーとともに、ジェリコーはセント・ポール大聖堂の地下納骨堂にネルソンの棺に隣りして永眠している。そしてまた、ネルソンの偉業を記念するトラファルガー広場に

94) Dreyer, *The Sea Heritage*, p.112.

95) Nigel Steel, Peter Hart, *Jutland 1916: Death in the Grey Wastes* (2003; London: Cassell, 2003), p.431.

96) To Ernest G. Pretzman, 27 Dec. 1916, in Marder, *Fear God and Dread Nought*, vol.3, p.408.

97) Horsfield, *The Art of Leadership in War*, pp.121-124.

において、ネルソンの巨大な記念碑の下に、ビーティーとともにジェリコーの胸像が掲げられてもいる<sup>98)</sup>。ネルソンと並ぶ歴史的地位には立てなかったとしても、ジェリコーはネルソンに準ずる、偉大な提督であったといえよう。

---

98) Dreyer, *The Sea Heritage*, pp.428-430. 拙稿「トラファルガー広場から見る近現代イギリス海軍史」（『大阪学院大学国際学論集』第20巻第2号、2009年12月）参照。